

余寒、お見舞い 申し上げます

善利川山 明見院

事を柔軟に見据えて。

年が明けて早くも一ヶ月が経ち、本格的な一年の節目である節分を迎えました。昨年を振り返ってみれば、ちようど一年前の二月に始まったロシアのウクライナへの軍事侵攻はとても衝撃的な出来事でした。これにより世界経済は縮小し、食料やエネルギーも高騰しました。戦争が長引くにつれ私たちの生活にも徐々にその影響が表れてきております。また、個人的に見ても昨年は事故や病気といった災難に見舞われた方が少なくなかったようにも思われます。いずれにせよ良い年だったと感じる人も、悪い年だったと感じる人も、与えられた時間は皆平等なわけですから、どんなにつらい状況であったとしても、道を切り開いていくには今の時間を大事にしていかなければならないのかもしれないかもしれません。

さて、今年の干支は「癸卯（みずのとう）」です。ので、十二支獣はウサギとなります。十二支獣は人々の暮らしの中で馴染みのある動物が取り上げられているわけですが、ウサギは古くから世界中のほとんどの地域に生息しており、狩猟の対象でもありました。中世のヨーロッパでは、生息していたアナウサギを食用肉用として飼育するようになり、やがて陸路より早い移動ができる船が普及してくると、航海中の食料を調達する手段として、停泊する世界各地の島々にウサギを輸出し、土着させるようになりました。その後、世界各地で改良されて、用途によって、毛用種、肉用種、毛皮用種、兼用種、愛玩用種などの多くの品種が生み出されました。また、近年では、医学や生物学などの各分野の研究・実験用としても飼育されています。

日本でも、縄文時代の貝塚からウサギの骨が出土していることから、古来より狩猟の対象であったことがわかります。また、明治時代には、アメリカや中国から当初はペット用として輸入されていましたが、やがて軍の防寒具や食肉として飼育することを政府が奨励していたこともあり、終戦まで飼育が盛んに行われていました。

現在、日本には、北海道にエゾユキウサギとエゾナキウサギ、本州・四国・九州にニホンウサギ、特別天然記念物に指定されている奄美大島のアマミノクロウサギが生息しています。

（次頁へ続く）

ウサギは非常に繁殖力が高く多産であることから、子孫繁栄や安産のご利益があるとして、狛ウサギなどを祀ったり、縁起物としてウサギをモチーフにした御守などを授ける神社も多くあります。また、ウサギは、賢く親しみやすいこともあり、「鳥獣戯画」に代表されるように擬人化され、童話や説話にも登場します。古事記に出てくる「因幡の白兔」の神話では、傷ついたウサギを大国主神が助け、その後、大国主神は稲羽の八上比賣（やがみひめ）と結ばれたため、その白兔を縁結びの神として祀る神社もあります。また、ウサギは逃げ足も速く「兎」が「兔」に似ていることから災難を回避することができると言われていて、アメリカなどでは、不思議な力が宿るとされるウサギの後ろ足は、魔よけ・幸運のシンボルとして剥製化したものをお守りとして携帯する風習もあります。

そのほかアジア各地には、「月にはウサギがいる」という伝承があります。これはインドに伝わる仏教説話の『ジャータカ』が起源とされています。『ジャータカ』はお釈迦様やその弟子の前世物語で、お釈迦様がウサギとして生まれた時の説話があります。その説話では、飢えたバラモン僧が森の中で動物たちに布施を乞うと、何も持っていなかったウサギは自分の身を捧げるべく焚火の中に身を投じたのです。しかし、ウサギは火傷ひとつすることなく助かります。実はこのバラモン僧、ウサギの修行の成果を試しに来た帝釈天の化身だったのです。

ウサギの知恵と徳に感激した帝釈天はウサギの慈悲行を後世まで語り継ぐため月にウサギを描いたと伝えられています。月の影は、ウサギが白をつく形で、日本ではウサギが餅をついているとされていますが、古代中国では不老不死の薬を作っているとされていることから、長寿のご利益を授かるためのウサギの縁起物もあります。

仏教でも薬師如来の従属に十二天が配置されますが、その中でも日天と月天は、薬師如来の脇侍として、その三尊を並べて安置している寺院も多くあります。その日天と月天にはそれぞれに円形の持ち物があります。日天の持ち物は太陽を表し、太陽に棲むカラス・金烏（きんう）が描かれ、月天の持ち物は月を表し、月に棲むウサギ・玉兔（ぎょくと）が描かれています。月日が早く過ぎていくたとえの「烏飛兔走（うひとそ）う」という成句の語源はここからきております。日本では、月も縁起が良いものとされており、月をツキととらえて「運がつく」とし、月に描かれるウサギも縁起物とされています。

そのほかウサギが多く生息する地域では、ウサギは山の神あるいは山の神の使いとして崇められることもあります。また、愛嬌のあるウサギは、神話や童話に限らず、わらべうたや漫画やイメージキャラクターとしても数多く登場し、私たちを和ませしてくれる存在でもあります。

（次頁へ続く）

さて、通常は「干支（えと）」とまとめて言いますが、正しくは「十干十二支（じっかんじゅうにし）」
と言ひ、これを略して「干支（かんし）」と言ひます。
そして今年の十二支の「卯」は、「子」から始まり
「亥」で終わる干支の十二進法の第四番目であり、そ
の文字は門を押し開けて中に入り込む様、あるいは土
を割って新芽が出てくる様を表しており、草木が「茂
る」ことを意味します。また、「卯」を季節に当ては
めるとちょうど三月から四月で、春の陽気で芽吹いた
草木が伸長していく時期となります。

前年の「寅」も、新芽がスクスクと伸長していく勢
いを表しますが、「寅」は厳しい寒さの中で緊張した
気です。これに対し「卯」は少し違って、土の中から
出てきた新芽が太陽の光を浴びて、寒さからの緊張が
解けて大地にのびのびと生い茂っていく気となります。

十二支のそれぞれの漢字には、十二支獣として出て
くる動物の意味は本来ないのですが、「卯」にウサギ
を当てたのはおそらく、ウサギが春の陽気の中、巣穴
から飛び出していく様が、土の中を割って出てきた新
芽がスクスクと伸びていくという「卯」の持つ意味合
いと、そしてウサギの柔軟な動きと新芽が多方向に広
がりながら伸びていく柔軟性が合致したのではないで
しょうか。

そして、十干の「癸（みずのと）」は、五行（木火
土金水）の中の水で、「甲（きのえ）」から始まり
「癸（みずのと）」で終わる干支の十進法の最後の
十番目にあたり、「揆（はかる）」を語源とします。

種子の核の中で発芽の時期をはかり待っている意味で
す。

以上のことから、今年は厳しい冬を乗り越えて、茂
るほどにスクスクと成長していく年と言えますし、今
にも飛び出さんと、そのタイミングをジツとうかがう
ような年とも言えます。

また、卯年は、「卯は跳ねる」という格言の通り、
景気も上向きになる傾向があり、よく飛躍、向上の年、
新しいことを始めるのに良い年とされますが、兎にも
角にも常日頃から準備を怠らず脚力を身につけておか
なければ、いざという時に思うように飛躍することは
できないと思います。また、イソップ寓話の「ウサギ
とカメ」の教訓のように自分の能力を過信し、油断す
れば何事もうまくいかないでしょう。ウサギの持つ穩
やかさと柔軟な性質、知恵と徳を身につけてこそ、真
に飛躍できるのではないのでしょうか。

特にここ数年で私たちの働き方や生活環境も急速に
変わってきて、個々の価値観も多様化が進む中、今ま
での常識にとらわれることのない柔軟な対応が一層求
められる時代となりました。西洋占星術でも一昨年よ
り、物質的なものが重要視される「土の時代」から、
目に見えないものが重要視される「風の時代」に移っ
たとされており、まさに今、社会の動きもリ
モットワークや情報のクラウド化などへとシフトして
きており、これからは個々の精神的な面も重要視され
てくることでしょう。

（次頁へ続く）

ウサギは長い耳で情報を捉えることに長けていると言われます。私も周りに惑わされることなく、見通しをしっかりと立てて、ゴールをまっすぐ目指して歩んでいきたいと思えます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

令和五年癸卯

住職 浦郷 宜右

合掌

